

- Saheki, M. (1966) Morphological Studies of *Macaca fuscata*. IV. Dentition. *Primates*, 7(4): 407-422.
- 酒詰仲男 (1961) 日本縄文石器時代食料総説。土曜会、Pp.338.
- Schlosser, M. (1924) Fossil primates from China. *Palaeontologia Sinica*, 1:1-14.
- 茂原信生・本郷一美・高井正成 (印刷中) 風穴洞穴 (岩手県) から出土した更新世ニホンザルとオオカミ。「風穴洞穴発掘調査報告」, 東北大学医学部.
- Shikama, T. & G. Okafuji (1958) Quaternary cave and frissure deposits and their fossils in Akiyoshi district, Yamaguti Prefecture. *Sci. Rep. Yokohama National Univ.*, sect.2, No.7 : 43-103.
- Swindler, D. R. (1967) Dentition of Living Primates. Academic Press, London, Pp.308.
- 谷口英昭 (1983) 霊長類マカク属の臼歯についての比較形態学的研究。九州歯会誌, 37 (6) : 979-1003.
- Young, C. C. (1934) On the Insectivora, Chiroptera, Rodentia and Primates other than *Sinanthropus* from locality 1 at Choukoutien. *Paleontol. Sinica*, Ser. C, 8 (Fasc.3), 1-139.

付記：ニホンザルについての考古学の概要

金子浩昌

ニホンザルについての考古学的な遺物については、食料の資源とされた遺骸と、その骨格を素材としてこれに加工し種々の道具を製作した遺物との二種類をみることができる。このことは人と動物との関わりをみる際に多くの動物についてみることができ、ニホンザルについても例外ではなかった。日本の考古学的な遺物のなかで、特にニホンザルに注目した報告は、はやく Edward Sylvester Morse の *Shell Mounds of Omori* (1879) にみるが、いまその標本を直接みることはできない。その後、長谷部言人によって縄文時代貝塚からの出土資料についての紹介とこれについての形質的な特徴が述べられ、また岩手県磯鶏貝塚出土のニホンザルの橈骨を素材とした垂飾品を紹介している(長谷部 1924)。

直良信夫は縄文貝塚出土のニホンザルの下顎骨を紹介し、また貝塚からの遺骸の出土と、その狩猟などについて述べている(直良 1947再版)。金子もまたその考古学的な出土状況について特に関心をもち、横浜市称名寺D貝塚(縄文時代後期)出土の下顎骨にみる年齢組成から縄文時代のサル類の一端を述べたことがあった(金子 1968)。またニホンザルの骨格に加工を施し、垂飾品あるいは刺突具とする諸例の集成を行っているが(金子、忍沢 1986)、それからみると縄文人はニホンザルの骨格について特別の関心をもっていったようである。上記した磯鶏貝塚出土の橈骨加工品と同じ素材の扱いによって製作された加工品が、愛知県伊川津、吉胡貝塚でも知られている。橈骨を素材にした同じような扱い方の例はニホンザル以外にない。ニホンザルの骨格が何故このような加工品の対象になったかは興味ある問題である。他の食肉獣類下顎骨との形態的な違い、丸みのある橈骨の近位骨端、あるいは他の中型鳥、獣類にはみられない四肢骨の形状に垂飾品あるいは利器などへの適合性を見出していたのである(金子 1984、1999)。

ニホンザルの遺骸は新石器時代以降の種々の遺跡から知られるが、出土遺跡例、一遺跡からの出土数は、縄文時代後期貝塚の例がもっとも多い。これは他の中小型獣遺骸の増加するのと期を一にする現象である。しかし、サルについては木の実食の上で、人と競合関係があったことが理由ではないかという意見もある(渡辺誠)。ただ、サルを含めた獣類遺骸の遺跡における出土状況には種々の要因が関わる。特にニホンザルに関しては遺跡を巡る地形的な条件との関わりが強い。関東地方の例では房総山地、三浦半島の山地帯を背景にした遺跡で遺骸の出土が多い。しかしその場合でも地域差がある。ニホンザル遺骸の出土状況の変遷をたどるには、一遺跡で時期差を把握できるような調査例、例えば千葉県市原市西広貝塚などはその一つである。この貝塚についての第一次調査報告はすでに刊行されているが(金子 1977)、今年度(平成14年)からそれ以降の3次限間の資料整理作業がはじめられるので、その成果をまとめてまた述べられることも多いので

はないかと考えている。なお弥生期の問題については、長野県湯倉洞穴のような山間高地での在り方があるが、内陸遺跡での例で、大量の獣骨を出土した群馬県新保田中村前遺跡(弥生中期)で、ニホンザル遺骸は四肢骨2点があったのみである。立地条件の違いがよくうかがえる例である(金子1994)。

文献

- 長谷部言人(1924)日本石器時代の猿について. 人類学雑誌, 39(4,5,6); 217-218.
- 金子浩昌・忍沢成規(1986)骨角器の研究(I)縄文編I. 慶友社
- 金子浩昌(1968)称名寺D貝塚出土の動物遺存体. 武蔵野, 47(2・3): 51-61.
- 金子浩昌(1977)脊椎動物遺存体の出土状況にみる時期的変化 貝塚における魚・鳥・獣類遺体の分布. 「西広貝塚 上総国分寺遺跡調査報告III」、早稲田大学出版部, 604-622.
- 金子浩昌(1984)貝塚の獣骨の知識 人と動物とのかかわり. 東京美術、考古学シリーズ10, Pp.173.
- 金子浩昌(1994)新保田中村前遺跡出土の脊椎動物遺体. 一級河川染名川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4分冊 第6・7次の調査. 群馬県埋蔵文化財調査事業団, 66-156.
- 直良信夫(1947)古代日本の漁獵生活(再版). 葦牙書房, 164-166.